平和の尊さをかみしめて

熊谷敏成（前原東・73歳）

(1) はじめに

故郷、仙台を去って早くも十二年になる。今静かに過ぎ去った七十有余年の人生を振り返ってみると、忘れられない思い出がいろいろある。その中でも終生忘れることができないのは終戦当時のあの苦しかった思い出の数々である。

戦後四十年過ぎた今日、日本の街にはどこにも戦争の傷跡は見られない。でも一瞬にして焼野が原になった森の都仙台の空襲のこと、終戦当時の食糧難、それに家を失い親を亡くした多くの孤児達の姿、すさんだ生活を続ける青年達やこども達のことなど私の心にありありと思い起され、今思うとぞっとする。

さてこの頃は私もすっかり地域の環境にも慣れ、今はそれなりに生きがいを求め、平和のありがたさをかみしめながら、少しでも地域のために役に立とうと頑張っている。

去る五月、社会見学ということで老人クラブの皆さんと一緒に初めてワンパク王国を訪れた時のことである。会場について先ず目についたのは、船橋市が平和宣言記念に平和のシンボルとしてつくった「平和を呼ぶ像」である。ここで記念写真を撮り、それを眺めながら「いつまでも平和であって欲しい」と心から願い、平和な時代に生きていることの幸せをしみじみ感じた。会場には幼稚園のこども達が先生方に連れられて大勢来ていた。先生方と一緒にゲームをしたり、いろいろな遊具を使って伸び伸びと遊び廻っていた。その姿を眺めながらしばし童心に返り、ワンパク坊主だった頃をなつかしく思い、またあの終戦当時のこども達のみじめな姿を思い出し、胸が締めつけられる思いだった。

(2) 終戦を迎えて

さて終戦を迎えた時、私は仙台市郊外のある小学校に勤めていた。時に二十八才、まさに青年教師として張り切っていた頃である。

あの日のことは今でもはっきりと覚えている。天皇陛下のお言葉があるというので、全校生徒が校庭に並び、放送が流れるのを「一体何が起こったんだろう」と不思議に思いながら待っていた。その中、ラジオを通して陛下のお言葉が流れ、「堪え難きを堪え忍び難きを忍び・・・万世のため太平を聞かん」というお言葉が途切れ途切れだったが、そこだけは割合にはっきりと聞えた。「ああ、日本は戦争に負けたんだな」と思い、力が抜けたような感じだった。その中しんとしていた校庭には、こども達もそれを感じたのかざわめきが起こり、淋しいような悲しいような複雑な心境だった。しかし、正直言って「やっと戦争も終り、これからは平和な世の中になるんだ。ああ、よかった」と思った。そう考えたのは私ひとりではなかっ

たと思う。

あるこどもが私のところへ来て「戦争が終ったから私のお父さんも帰ってくるよね」と言った。私は「うん、きっと帰って来るからそれまでは、お母さんを助けて頑張るんだよ」と励まして別れた。そのこどもは喜んで元気よく「さようなら」と言って帰って行った。その後姿を眺めながら父親が一日も早く無事に帰って来ることを心から祈ると共に、こども達のためにも二度とあの恐ろしい戦争を起こしてはならない。この純真なこども達を再び戦場に送ってはならないと固く誓った。

戦争が終り「ああ、よかった」と思ったのも束の間、それからは苦しい生活が続いた。食糧は思うように手にはいらなくなり、リュックサックを背負っての買出し、妻の着物と食糧との交換など、中には栄養失調で倒れる人もあり、「こうした生活がいつまで続くのか、これからはどんな世の中になるのか」と考え、不安でした。こども達の弁当も農家のこどもを除いては、さつまいも、じゃがいも、かぼちゃの代用食といった有様で中には弁当を持って来られないこども達もいた。

その中仙台にもアメリカ兵が進駐し、学区内の街の至るところで、その姿が見られるようになった。ところが、それ以来急に遅刻するこども、欠席するこどもが多くなった。「どうしたんだろう」と思い、学区内をまわってみると学校附近の駅に電車が着くと、アメリカ兵がたばこの吸いがらを捨て、それをこども達が先を争って拾っていた。中には親に頼まれて拾っているこどももいた。その中アメリカ兵はガムやチョコレートまで捨てるようになった。その姿を見て、如何に食べ物に不自由していたとは言いながら、敗戦国のみじめさをまざまざと見せつけられた感じでほんとうになさけなく、涙がこみあげて来るのを抑えることができなかった。今もその姿ははっきりと私の心に焼きついている。

今も終戦の日を迎える度に、あの頃のみじめなこども達の姿、戦場に華と散った同級生の姿が思い起され、胸が熱くなる思いである。

先日、あの当時の教え子から久しぶりに手紙があり、「先生お元気ですか。私も早いもので五十の坂を越える年齢になりました。今あの頃のことを思うと夢のようです。先生方と一緒に防空壕を掘ったこと、警戒警報がなり、急いで退避したこと、食糧不足で友達と弁当を分けてたべたこと。終戦後初めての運動会の時、進駐軍の命令で万国旗を取り外したことなど思い出され、胸が一杯になります。」と書いてあった。私は何度も読み返し、平和な時代に生きていることのありがたさをかみしめているこの頃である。

次第に世の中が何となく落ちついて来たものの、生活は苦しくなる一方で、空襲で家を焼かれ、相変らず防空壕での生活を余儀なくされている人々、長いこと住み慣れた仙台を去り、知らない土地へ移って行く人々。間借り生活を続けている人々など様々でした。私達も仕方なく、妻の実家のある田舎へ身を寄せることにした。それは昭和二十二年九月下旬のことだった。食糧には不自由しなかったが、田舎の生活に経験のない私達にとっては淋しい不安な毎日でした。

村の青年達は何をするということもなく、昼間から酒を飲んでは村中を歩きまわり、徒党を組んではけんかをする。また私の住宅を始め、他人の家に石を投げたり、学校の窓ガラスをこわすなどの乱暴を働く。その無軌道振りは驚くばかりで、地域の人々もほとほと閉口していた。こうした青年の行動は、中学校の生徒にも大きな影響を与えた。グループを作ってのけんかをする。弱い者をいじめる。畑を荒す。無断欠席をするなどいろい

ろな問題が起こり、私達はこうした問題に対し「どうすればよいのか」「今の私達にできることは何か」とその取扱いに悩み苦しみ続けた。最後には自身を失い学校をやめようとさえ考えた。

さて、ある日のこと。学校へ行く途中でひとりの青年に出合った。私は思いきって「お早よう。毎日何をしているの」とたずねた。その青年は変な顔をして黙って通りすぎて行った。私は後から「気が向いたら遊びに来なさい」と声をかけた。それから何日かすぎたある日のこと、その青年は仲間数人を連れて「先生、今晩は」と言ってやって来た。私は「さあ、おはいり。よく来たね」と笑顔で迎えいれた。妻も「遠慮しないでこっちへおはいり」と、お茶をいれたり、お菓子を出したり、話し相手になったり、いろいろ協力してくれた。最初は遠慮していたが、その中すっかり心を開き、お菓子を食べながらこれまでの淋しかったこと、悩んだこと、いろいろ地域の人々に迷惑をかけたことなど反省しながら、時間のすぎるのも忘れて話してくれた。その中笑い声さえ聞えるようになり、久しぶりに楽しいひとときを味わった。時計を見たらもう、午前二時を過ぎていた。これを機会に青年達が毎日集まって来るようになり、私の住宅はいつの間にか彼等の集会所になった。そして次第に「ソロバンを習いたい。習字をやりたい。勉強をやり直したい。」と、それ以来青年達の行動も日増し落ちつきを取り戻し、あのすさんだ姿はすっかり影をひそめ、夜学を始めるまでになった。その姿はほんとうに真剣そのものだった。

こうして中学校に勤めながらの青年の指導は、私にとっては忙しかったが、張りのある生活だった。毎日生き生きと明るく活動している姿を思う時、「あのとき学校をやめないでよかった。これからも青年達のために少しでも役に立つならばその指導に精一杯頑張ろうと心の中でつぶやいた。そしていつまでも平和であることを心から願わずはいられなかった。

(3) 終りに

私の誠につたない体験の一端を述べて来たが、今この平和な時代に生きてほんとうに幸せだということである。二度とあの恐ろしい、いまわしい戦争を起こさないためにも、平和な時代の昭和しか知らない若い世代の人々にその恐ろしさを語り伝えることが大切であり、それが私達の責任であると信じ、この度の原稿募集に応募してみた。

これからも老いも若きも「生きていてよかった。」「住人でよかった」という思いやりの心に支えられた、平和な街づくりに努めていきたい。

皆さん、そういう街づくりのため私達の力でいつまでも平和の灯をもやし続けよう。